

## 巻頭言

## 「心からの…」

朴 仁三

東京女子医科大学循環器小児科

## To Be Sincere

In-Sam Park

Department of Pediatric Cardiology, Tokyo Women's Medical University

小生近頃になって「心からの医療」という言葉を頻用しているようであります。本年4月の新入生歓迎の挨拶で、無意識のうちに口から出たのが「心からの医療云々…」という話でした。「心のこもった医療」とはま聞きませんが、「心からの医療」という言い方をされる方はあまりいないように思います。しかし、「心からの～」には「自然発露的な」、「まごころを込めた」、「親身な」、「一所懸命な」、「渾身の力を込めた」という意味が含まれているようで、実は目下のお気に入りです。

「心からの医療」という言葉から第一に想起されることは、恩師の故 高尾篤良名誉教授に関する故事であります。現在小生が所属する東京女子医大でも、心臓手術の成績が芳しくなかった時代があり、高尾教授は手術目的で他院に患者さんを紹介していたそうです。この話を聞いた時、患者さんの生命を最も重く考えておられた、高尾教授の *humanity* にいたく感激したことが思い出されます。

言うまでもないことですが、小児循環器科という診療科の特殊性を考えますと、小児科医単独では患者さんに十分な医療をなすことはできません。患者さんに「心からの医療」を行うには、優れたパートナーである心臓外科医が不可欠なのです。そこで近頃の小生の「心からの心配」なのですが、この国には若くて活きのよい心臓外科医が一体全体どのくらいいるのでしょうか？ 小生がよく知る「既に若くはない」心臓外科の先生方は、しばしば自らを称して「絶滅危惧種」と卑下しております。「言い得て妙」ではありますが、冗談では済まされない問題でもあります。

心臓外科医、殊に小児の心臓外科医が減少し続ける原因を自分なりに考えてみました。第一は（こんな言い方をすると怒られるかもしれませんが）、今では若干鎮静化してきた感のある患者さん、患者さんの御家族、マスコミのクレーマー化です。リスクの高い診療科に進む医師が激減した大きな理由がここにあると思います。もちろん医師に問題がなかったとは言えませんが、このために小児の心臓病患者さん自身も窮地に立たされかねなくなっております。また、お子様が治療の対象となれば御家族の求めるレベルも当然高くなり、ベテラン医師の手術件数ばかりが増え、若手医師が担うべき軽症例は相対的に減少しているかもしれません。

二番目には患者数の減少です。近年の少子化、NIPTや胎児エコーの普及に伴う先天性心疾患児の出生数減少、非侵襲的治療の発達による心臓外科の診療対象疾患の減少が理由として挙げられます。また、患者数に比して施設数が多すぎることも若手医師の経験、修行の機会を失わせる原因になってはいないでしょうか。

実数はわかりませんが、小児心臓外科を標榜する施設は少なからず、かつ心臓外科医の成り手はわずかという状況では、各々が小規模なグループ診療を行わざるを得なくなります。個々の医師は疲弊し心身を病み、やがて別の道を選択するという結末も決して稀ではないと思われまふ。これが小児心臓外科医減少の三番目の理由ですが、ほかにもいくつか原因はありそうです。確実な未来像を思い描くことはできませんが、このまま拱手傍観するのみで事態が好転することはないでしょう。

以上述べたことからご理解いただけるとありがたいのですが、優秀な小児心臓外科医の育成は本学会の喫緊事項

と考えられます。10名前後の優秀な小児心臓外科医、次代の後継者候補30名、次々代の後継者候補の50名が国内各地域の拠点病院にバランスよく配置され、心臓手術を行うことになれば万全とは言わないまでも、随分進んだ体制ができて上がるのではないのでしょうか。優秀な外科医のもとに患者さんをお願いできれば手術成績は向上し、患者さんの「良い治療を受けられた」という充足感が相まって医療訴訟は減ることでしょう。小児科医も“組織の論理”と“医師の良心”の相克に悩むことなく、“patient first”を貫きやすくなることでしょう。さらに豊富な経験や正当な競争を経た結果として、多くの若い外科医が将来名人に化けるかも知れません。これが全く手前勝手な少生の「心からの夢」でございます。

「小児心臓外科が危殆に瀕しているぞ」と、大きな声を上げられる方がおられなかったので、敢えて巻頭言にこの話題を提示しました。若い心臓外科医が世界一を目指すことができ、小児科医は患者さんを何の迷いもなく最高の外科医に任せられる、そんな体制を構築すべく深い議論がなされることを期待して止みません。